

# クインティリウス一族とローマ帝国中央

桑 山 由 文

## はじめに

元首政期ローマ帝国において、帝国東部、すなわちギリシア文化圏の出身者は、帝国西部より遅れて後1世紀後半、フラウィウス朝期に入ってからようやく、第一政治支配層である元老院議員身分に本格的に到達していった。後2世紀初頭のトラヤヌス帝期には、政権中枢の要職にも就き、ハドリアヌス帝期以降は元老院議員身分において一定の割合を占めるようにもなった。2世紀後半になると、ローマ政治支配層においてギリシア的東部の出身者は、もはや珍しくない存在であった<sup>1)</sup>。

これら東部出身元老院議員は、ローマ到来以前からのギリシア都市の出身者、すなわち土着系と、ローマ共和政期から元首政初期にかけてさまざまな形でローマ市やイタリアから移住したイタリア出身者、すなわちイタリア系との二つに大きく分かれる<sup>2)</sup>。このうち、より早くにローマ元老院議員身分やコンスル職に到達したのは、イタリア系の方であった。彼らは、ローマ帝国中央とのつながりを持っており、それゆえ元老院議員身分への進出が早かったのだといえる。

しかし、元老院議員身分進出の時期以外の点、とくにその心性については、イタリア系東部出身元老院議員は、土着系とはあまり異ならないと考えられるか、あるいは曖昧なままに扱われ、基本的には同じギリシア文化圏の人であったとされる。その背景には1990年代以降、ローマ支配下のギリシアについて研究が進むにつれ、東部出身元老院議員がギリシア的価値観を有したままローマ政治支配層に入っていったと認識され

1) R. Syme, *Greeks Invading the Roman Government*, The Seventh Stephen J. Brademas, Sr., Lecture, 1982, 9-28 = *Roman Papers*, IV, 1-20. 桑山由文「ローマ帝国東部の発展と王家の記憶—フラウィウス朝から五賢帝期へ—」、『西洋史研究』新輯30、2001年、41-42頁。

2) 桑山、*王家の記憶*、45-47頁。「土着系」も状況はさまざまであり、若干の問題がある表現だが、ローマ到来以前からのこの地のギリシア系の人々を指して便宜的に用いる。

るようになっていったことがある。たとえばG. Salmeriは、中央進出の度合いの差を示しつつも、基本的には東部出身の元老院議員をひとまとめに扱い、彼らには「ローマ元老院に座しているときですら、ギリシア文化という共通の理想が染み込んでいた」とする<sup>3)</sup>。彼らが政治的にはローマ、文化的にはギリシアであったというのである。とりわけ、ハドリアヌス帝期以降の東部出身元老院議員については、先行研究は概して、土着か植民市出身かの区別をほとんど問題としなくなる傾向にある<sup>4)</sup>。

しかし、このような理解はギリシア文化の優位をアプリアリに考えすぎてはいないか。本稿は、属州アジアのローマ植民市出身のクインティリウス一族を取り上げ、この一族が、後1世紀末に元老院議員身分に到達してから、2世紀末にコンモドゥス帝によって粛清されるまで、数世代にかけていかなる経歴を歩んでいったのかを考察する。それを通じてこの一族の心性を論じ、ローマ植民市をはじめとするイタリア系の東部出身元老院議員がギリシア文化圏においてどのような存在であったのかを理解するための手がかりとする。

## 第1章 クインティリウス一族の元老院議員経歴

クインティリウス一族は、属州アジア北西のローマ植民市アレクサンドリア＝トロアスの出身である。家系で初めて元老院議員身分に入ったのは、後1世紀後半のSex.クインクティリウス・ウェアリウス・マクシムスである。トロアス出土の碑文によれば、彼はネルウァ帝期に「幅広のトガ」(latus clavus)を受けて元老院議員身分経歴を開始し、属州ビテュニア＝ポントゥスのクアエストルを務めた<sup>5)</sup>。

この人物については、小プリニウスの友人で、『書簡集』でも宛先として名前が挙がるマクシムスと同一と考えられている。このマクシムス

3) G. Salmeri, *Dio, Rome, and the Civic Life of Asia Minor*, S. Swain (ed.), *Dio Chrysostom*, Oxford, 2000, 60-61. もっとも、こうした彼らの心性は、彼らがローマ文化に否定的であったことを意味するわけではない。cf. S. Swain, *Hellenism and Empire*, Oxford, 1996, 70-71.

4) B. Levick, *Greece and Asia Minor*, *CAH XI*, 2000, 611も、出身都市の差異には言及するものの、基本的には東部出身元老院議員としてひとまとめに説明する。他にもR. Syme, *Some Arval Brethren*, Oxford, 1980, 90f.

5) CIL III, 384 = ILS 1018.

は、ビテュニア勤務をトラヤヌス帝に高く評価され、属州アカイアへ自由市担当監督官 (corrector liberarum civitatum) として特別に派遣された人であるが、さらに、同じ小プリニウスの『頌詞』で存在が言及され、アツリアノスが伝えるエピクテトス『提要』の登場人物でもあるということで、先行研究はほぼ一致している<sup>6)</sup>。

ただし、この家系では、代々ほとんど同じような名前を名乗っていったため、彼の後、子孫が元老院議員としてどのような経歴を重ねていったのかについては議論がある。

まずは、東部出身元老院議員について詳細なプロソポグラフィ研究を行った H. Halfmann に拠りながら、一族の経歴を示す。彼によると、Sex. クインティリウス・ウァレリウス・マクシムス①と表記) の息子は、ほぼ同名の Sex. クインティリウス・ウァレリウス・マクシムスである (以下、マクシムス②)。なお、これ以降は一族はクインティリウスではなく、クインティリウスを名乗る)<sup>7)</sup>。この人は、第1イタリカ軍団と第13ゲミナ軍団の軍団将校を務めた後、属州アカイア担当財務官 (quaestor) となり、その後、護民官、プラエトルを経て属州アカイア総督 (legatus) となった。

マクシムス②の息子が、同名の Sex. クインティリウス・ウァレリウス・マクシムス (以下、マクシムス③) と、Sex. クインティリウス・コンディアヌス (以下、コンディアヌス①) の兄弟である<sup>8)</sup>。彼らについては碑文から経歴が分かるだけでなく、2世紀後半から3世紀初頭の歴史家カッシウス・ディオが『ローマ史』において、兄弟仲が大変良く、さ

6) Epictetus, III, 7; Plinius, *Epistulae*, VIII, 24; *Panegyricus*, 70, 1. H. Halfmann, *Die Senatoren aus dem östlichen Teil des Imperium Romanum bis zum Ende des 2. Jh. n. Chr.*, Göttingen, 1979, Nr. 40; B. Rémy, *Les Carrières sénatoriales dans les provinces romaines d' Anatolie au Haut-empire*, Paris, 1989, No. 66; M. Riel, (ed.), *The Inscriptions of Alexandria Troas*, Bonn, 1997, 73-74. 桑山「元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容—東部出身元老院議員の台頭とアテナイ」笠谷和比古編『公家と武家IV 官僚制と封建制の比較文明的考察』思文閣出版、2008年、435頁。なお、マクシムスは属州アカイアの自由諸都市の財政再建のみを任されたのであり、同時期に別に属州総督が存在した。総督に取って代わった訳ではない。たとえばRémy, *ibid.* は、curator rei publicaeのような職務と考える。

7) Halfmann, *op. cit.*, Nr. 49.

8) Halfmann, *op. cit.*, Nr. 75, 76. なお、Levick, *Greece and Asia Minor*, 614. はマクシムス①もクインティリウスという名であったとする。

まざまな公職も共同で務めたことを特筆してもいる<sup>9)</sup>。ローマ帝政後期の歴史家アンミアヌス・マルケッリヌスも、その兄弟愛にわざわざ言及するほどであった<sup>10)</sup>。本稿でも、「クインティリウス兄弟」と表記する場合、この二人を指す。この兄弟は、アントニヌス・ピウス帝期の151年に二人揃って正規コンスルとなった。定員2名の正規コンスルを兄弟で独占した訳である。その後、ピウス帝期末かマルクス・アウレリウス帝期最初の161年に皇帝管轄属州総督となったが、どの属州かは分かっていない。また、就任年は169年の可能性もある。その後、168/169年あるいは169/170年にアジア総督を務め、170年代前半に属州アカイアの自由市担当総督 (legatus Augsti pro praetore ad corrigendum statum liberarum civitatum) となり、175-6年にはマルクス帝の東方巡察旅行に幕僚として随伴した。

この兄弟にはそれぞれ息子が一人いた。コンディアヌス①の息子は、(Sex.?) クインティリウス・マクシムス (以下、マクシムス④) である<sup>11)</sup>。彼は172年の正規コンスルであり、175-179年頃にパンノニア・スベリオル総督となった。一方、マクシムス③の息子は、Sex.クインティリウス・コンディアヌス (以下、コンディアヌス②) であり、175-179年頃にはマクシムス④の担当属州に隣接するパンノニア・インフェリオル総督となり、180年に正規コンスルとなった<sup>12)</sup>。

このようにクインティリウス一族は、ネルウァ帝期から着実に元老院議員身分の中での地位を上昇させていったのであるが、183年頃に、マルクス帝の次の皇帝であるコンモドゥスによって叛意を疑われ、一族抹殺の憂き目にあった。

以上のような、Halfmannによるクインティリウス一族の再構成は、E. Groag 以来の先行研究の成果を押さえつつ、G. Alföldy の研究成果を核としたもので、以後広く受け入れられた<sup>13)</sup>。PIR<sup>2</sup>も基本的にこの流れを

9) Cassius Dio, LXXII, 5, 3. *Digesta*, XXXVIII 2, 16にも兄弟連名で総督として記されているなどを根拠として、後述の公職もすべて兄弟二人で就任したことが広く認められている。

10) Ammianus Marcellinus, XXVIII, 4, 21.

11) Halfmann, op. cit., Nr. 108.

12) Halfmann, op. cit., Nr. 119.

13) G. Alföldy, *Konsulat und Senatorenstand unter den Antoninen: Prosopographische Untersuchungen zur senatorischen Führungsschicht*, Bonn,

踏襲している<sup>14)</sup>。ただし、*PIR*<sup>2</sup>は、マクシムス④については、クインティリウス兄弟のどちらの息子であるのかが史料的に確認できないため、判断を保留している。なお、『ローマ皇帝群像』「コンモドゥス・アントニヌス」第4章は、叛意を持っていると疑われた「コンディアヌス (①)の息子」を「セクストゥス」つまりコンディアヌス②と記しているが、コンディアヌス①とマクシムス③とを取り違えた、不正確な記述であると広く認められている<sup>15)</sup>。

もっとも、断片的な碑文史料からの情報が大半というプロソポグラフィ研究の性格上、Halfmannらの再構成はこの一族の経歴全てを押さえたものではなく、たとえばマクシムス①、②がコンスル職に到達したのかは不明である。再構成への異論もある。アレクサンドリア＝トロアス出土の碑文を蒐集したM. Riçlは、クインティリウス一族の経歴をかなり異なったものと理解する<sup>16)</sup>。第一に、マクシムス②の経歴を記すトゥスクルム出土の碑文 (CIL XIV, 2609) が、マクシムス①の経歴の異なる部分を示していると考え、マクシムス②の存在を否定する。この考えに従えば、マクシムス①の息子がクインティリウス兄弟ということになる。その場合、マクシムス①が複数属州でクアエストルを務めることとなるため、通常の元老院議員経歴を外れてしまうが、まったくありえない訳ではない。

第二にクインティリウス兄弟とその子どもたちについてである。コンディアヌス②とマクシムス④がそろって両パンノニア属州総督であったというHalfmannらの主張の主たる根拠は、マルコマンニ戦争において「クインティリウスたち」が指揮を執っていたというカッシウス・ディオの記述である<sup>17)</sup>。そこでRiçlは、この「クインティリウスたち」がクイ

---

1977; E. Groag, *Die römischen Reichsbeamten von Achaia bis auf Diokletian*, Wien, 1939. Halfmannの見解を受け入れているものは、たとえばP. M. M. Leunissen, *Konsuln und Konsulare in der Zeit von Commodus bis Severus Alexander (180–235 n. Chr.) : Prosopographische Untersuchungen zur senatorischen Elite im römischen Kaiserreich*, Amsterdam, 1989; A. Birley, *Marcus Aurelius: A Biography*, London & New York, 2<sup>nd</sup> ed. (paperback ed.), 1993.

14) *PIR*<sup>2</sup>, Q n. 21, 22, 24–27.

15) *Scriptores Historiae Augustae*, Commodus Antoninus, 4, 9.

16) Riçl, op. cit., 259–265.

17) Cassius Dio, LXXI, 33, 1.

ンティリウス兄弟を指すと考え、さらに172年と180年のコンスルもクインティリウス兄弟の二度目のコンスル職なののだとして、マクシムス④については実在さえも否定する。

しかし、172年と180年のコンスル職が二度目のものであるという主張は、これらのコンスル職を兄弟の子どもたちに帰す Alföldy 説に何らかの根拠をもって反駁するものではなく、また、そもそも、兄弟が常に一緒に職務に就いたというディオの記述を無視しており、受け入れがたい。両パンノニア総督をクインティリウス兄弟の方だとする推定も、正規コンスル職から25年近くも後でかなりの高齢となっているにもかかわらず、属州アカイア自由市担当総督、マルクス帝の東方巡察、パンノニア総督を精力的にこなしていることになり、納得しがたい。加えて、『ローマ皇帝群像』の記述に従うなら、Ricl説ではコンモドゥス帝が、コンスル職にまだ就いてすらいない、経験の浅い元老院議員コンディアヌス②の謀反を疑ったことになってしまう。マクシムス④が存在しなかったとする考えも、クインティリウス兄弟が息子たちの一人とともに殺された、というディオの記述を等閑視している。

したがって、Riclの主張には、マクシムス①と②が同一人物である可能性など見るべきものはあるものの、Halfmannらの見解の方が、圧倒的に説得力がある。本稿も基本的にはこちらの見解に従って考察を進めるが、このような議論があるにせよ、クインティリウス一族については、以下の点でおおむね先行研究の認識は一致している。

第一に、この一族は、トラヤヌス帝によってマクシムス①が高く評価されてより後も着実に地位を上昇させ、クインティリウス兄弟の世代、すなわち、アントニヌス・ピウス帝期までには、151年の正規コンスル独占に象徴されるように、ローマ帝国中央政界において大きな権勢を誇った。同時代の医師ガレノスの証言によれば、皇帝家とはかなり親しい関係にあったらしい<sup>18)</sup>。

第二に、マクシムス①以降、彼らが単に帝国中央政界で高い位置にいただけでなく、いずれもローマ帝国属州統治という実務に手腕を発揮もしたことである。とりわけ、複数世代にわたって属州アカイア、すなわちギリシア本土に派遣されたことは注目に値する。筆者が既に別稿で分

18) Galenus, *De Cognitione*, 9, 10. コンディアヌス②が、マルクス帝の女婿クラウディウス・セウェルスと親しい間柄であった。PIR<sup>2</sup>, Q n. 22.

析したように、ギリシア文化圏出身元老院議員は、イタリア系・土着系を問わず、おそらくはギリシア語やギリシア都市に関する知識を買われ、帝国東部属州で主として用いられる傾向があった<sup>19)</sup>。しかし、一つの属州、それもローマ人によって文明発祥の地、「真のギリシア」と見なされていた属州アカイアに特化していることは異例である<sup>20)</sup>。

しかも、彼らはほぼ通常の派遣ではなかった。マクシムス①の任務は、前述の通り、ビテュニア時代の手腕を買われ、ギリシア本土の自由都市の財政状態を建てなおすことであった<sup>21)</sup>。クインティリウス兄弟の自由都市担当総督職は、Halfmannらによって、マクシムス①の職務とほぼ同じ名称であったと推定されているが、一方で、その職務内容は大きく異なったとも考えられている。アカイアはプラエトル格属州であるが、兄弟はコンスル格としての赴任であり、通常派遣の総督よりも上位の存在であった<sup>22)</sup>。その背景には何らかの特殊な事態が想定される。170年にはコストボキ族がドナウ川を越えて南下し、ギリシア本土を襲ってエレウシスまで到達するという、元首政始まって以来の大事件も起こっており、J. H. Oliverはその事後処理のための任命であったと解釈する<sup>23)</sup>。マクシムス②は通常経歴の中でのアカイア赴任であるが、財務官、およびプラエトル格総督と二度も赴任しており、きわめて珍しい<sup>24)</sup>。マクシムス①以来、クインティリウス一族がローマ帝国中央で、ギリシア本土統治に関する専門家と認識されていた可能性は、きわめて高いといえる。

19) 桑山、王家の記憶、46頁。同「ウェスパシアヌス帝の東方政策」101-103頁。cf. Levick, *Greece and Asia Minor*, 611.

20) ローマ中央のギリシア本土観については、桑山、ギリシア世界の変容、434頁。

21) Plinius, *Epistulae*, VIII, 24; *Panegyricus*, 70, 1.

22) J. H. Oliver, *Marcus Aurelius: Aspects of Civic and Cultural Policy in the East*, Princeton, 1970, 66-72; J. Tobin, *Herodes Attikos and the City of Athens*, Amsterdam, 1997, 231.

23) Oliver, op. cit., 69-70.

24) なお、彼の時代には属州アカイアは元老院管轄から皇帝管轄へ移管されており、総督人事には皇帝の意向が直接反映されるようになっている。

## 第2章 ローマとギリシアの狭間で

### 第1節 ギリシア文人としてのクインティリウス一族

クインティリウス一族がこのような役割を担った背景のひとつにはおそらく、この一族が単にギリシア文化圏出身でギリシア語を解しただけでなく、代々、ギリシア学芸に能力を発揮していたことがあった。マクシムス①は、前述のようにエピクテトス『提要』の登場人物との同定が正しいならば、エピクロス派哲学に詳しい人物であった。アカイアのコレクトルであった時に、当時エペイロスにいた哲学者エピクテトスをわざわざ訪れ、議論を戦わせている<sup>25)</sup>。ただし著作などは知られていない。

彼の孫のクインティリウス兄弟（マクシムス③とコンディアヌス①）の代になると、ギリシア文人としての側面はより強くなっていった。兄弟は、現存はしていないが、『農耕について』というギリシア語作品を著した。アテナイオス『食卓の賢人たち』がその内容に言及しており、作品の評価は低くはなかったようである<sup>26)</sup>。カッシウス・ディオも、彼ら兄弟の名声について触れる際、第一にその「パイディア」を挙げている<sup>27)</sup>。ギリシア本土のピュティア祭でも審判役に選ばれた<sup>28)</sup>。この時には、第二ソフィストの代表的人物として名高いヘロデス・アッティコスと意見が対立しており、兄弟が自身の鑑賞眼にかなりの自負を持っていたことも分かる。ヘロデスとは犬猿の仲であった一方、兄弟は他のギリシア知識人たちとの人脈を持ってもいた。マルクス・アウレリウス帝の東方属州巡察旅行に随伴した際は、帝がスミュルナにおいて、当時名高いギリシア弁論家であったアリスティデスと面会する仲介をしている<sup>29)</sup>。

マクシムス③の息子であるコンディアヌス②についても、著作などは伝わっていないが、父、おじや曾祖父らと同様の傾向を持っていたことが、カッシウス・ディオ『ローマ史』が伝える、興味深いエピソードから分かる<sup>30)</sup>。ディオによると、コンモドゥス帝による一族粛清時にコン

25) Epictetus, III, 7.

26) Athenaeus, 14, 649e.

27) Cassius Dio, 72, 5, 3.

28) Philostratus, *Vitae Sophistorum*, 559.

29) Philostratus, *Vitae Sophistorum*, 582.

30) Cassius Dio, LXXII, 6.

ディアヌス②はシリアの所領にいたが、落馬によって死んだように見せかけて逃亡し、変装して各地をさまよっているとの噂があった。後にコンモドゥス帝が殺害され、ペルティナクスが皇帝となると、コンディアヌス②を名乗って、コンモドゥス帝により没収されたクインティリウス一族の財産と地位を騙しとろうとする人物が出現した。この偽者は、「多くの者からさまざまなことを質問されてもうまく答えていた。だがしかし、ペルティナクスから、かの人（筆者註：コンディアヌス）が知っていたであろうギリシアに関する事柄を尋ねられると、大変困惑し、何を尋ねられているのかも分からず」正体が露見してしまったのである。ディオは、「（偽者は）外見は生来似ており、練習によって他の点も真似ることができたが、彼のパイディアを共有することはできなかった」とこのエピソードを締めくくっている。この文脈での「パイディア」は、ペルティナクス帝の質問内容とともに考え合わせると、明らかに教養一般ではなく、ギリシア学芸を指している。

このように、クインティリウス一族は、単にギリシア文化圏出身で、ギリシア語やギリシア文化圏に親しんでいたというだけではなかった。いわばギリシア学芸は、クインティリウス一族の「家学」だったのであり、代を重ねるにつれ、その傾向は強まってきてさえたのである。これは、本稿「はじめに」で述べた、東部出身元老院議員の傾向と一致する。その背景には、多くのローマ植民市が、ギリシア文化圏におけるラテン文化の「孤島」であったため、入植者たちが徐々に周辺都市のギリシア文化に同化されていったという事情がある<sup>31)</sup>。一族の出身都市アレクサンドリア＝トロアスもその例に洩れなかった。そもそもこの都市は、ローマ共和政末期からアウグストゥス帝期にかけて、イタリアからローマ退役兵が入植者として送り込まれ、ローマ植民市コロニア＝アウグスタ＝トロアス（またはコロニア＝アウグスタ＝トロアデンシス）となったものの、それまではかなりの規模を持つギリシア都市であった。もともと、一つの都市としての歴史は新しい。ヘレニズム時代初期にアンティゴノス・モノフタルモスが、トロアス地方の七都市を「集住」させて、作り上げたのである。当時はアンティゴネイアという名であり、リュシマコスがこの都市を支配下に置いた時、アレクサンドロス大王にちなむ

31) B. Levick, *Roman Colonies in Southern Asia Minor*, Oxford, 1967; S. Mitchell, and Waelkens, M., *Pisidian Antioch*, London, 1998, 11.

名アレクサンドリア＝トロアスに変えられた。その後はセレウコス朝、および共和政ローマの支配下に入ったが、交通の要所に位置したため経済的に繁栄し、文化面でもギリシア文人を輩出している<sup>32)</sup>。

それゆえ、ローマ元首政期におけるトロアスの政治支配層は退役兵入植者であったとはいえ、住民の中での割合は低く、大半は古くからのギリシア系の人々であった。M. Sartreは、トロアス発行の貨幣の分析から、元首政期でもこの都市では概してギリシア的要素が優勢であり、入植者たちもハドリアヌス帝期以降、ギリシア文化に強く染め上げられていったと指摘する<sup>33)</sup>。

だが、興味深いことに、クインティリウス一族は、以上の来歴に基づくようなギリシア文人としての「顔」を、首都ローマでは見せていなかった。ここで想起したいのが、前述した、コンディヤヌス②の偽者のエピソードである。これによれば、偽者がベルティナクス帝から尋問されるまでに多くの人から受けたさまざまな質問は、ギリシア関連の内容ではなかったことになるし、使われた言語も当然ギリシア語でなく、ラテン語であったろう。首都ローマ社会において、もしこの一族がギリシア文人として名高ければ、ギリシア関連の質問がベルティナクスの尋問より前に出てもよさそうなものであるし、そもそも偽者もギリシア関連の知識なしに本人を模倣するはずはない。ということは、この一族の「家学」がギリシア学芸であることは、首都ローマではあまり知られていなかったことになる。すなわち、クインティリウス一族は、少なくとも2世紀末においては、非ギリシア文化圏出身の他のローマ元老院議員たちと同じように振舞っており、周囲からもそうした存在と理解されていたといえる。

こうした、ギリシア的側面を見せない、ローマ元老院議員としてのクインティリウス一族の様子は、ラテン語史料である、前述の『ローマ皇帝群像』「コンモドゥス・アントニヌス」の記述にも一致する<sup>34)</sup>。こちらでも、クインティリウス一族はコンモドゥス帝により殺害された元老院

32) Ricl, op. cit., 15-21.

33) M. Sartre, *L'Orient romain*, Paris, 1991, 270. なお, Ricl, op. cit., 121は、入植者の子孫たちによって、ラテン語の *colonia* や *decurio* の代わりに、ギリシア語の *πόλις* や *βουλή* が用いられた例を挙げている。

34) *Scriptores Historiae Augustae*, Commodus Antoninus, 4, 9.

議員たちの一部として、それなりに字数を割いて説明されているが、そこからは、この一族のギリシア文人としての側面はまったく読み取れない。一族粛清の理由として挙げられるのは、「コンディアヌスの息子セクストゥス」(コンディアヌス②)のコンモドゥス帝に対する叛意のみである。コンディアヌス②が一族粛清時に滞在したシリアへの言及などもない。あくまでもこの一族はローマ中央の有力元老院議員家系として描かれ、コンディアヌス②も首都ローマにいたかのように記されているのである。たとえば同書の別の箇所、マルクス帝の女婿クラウディウス・ポンペイアヌスがアンティオキア出身と差別的に言及されたり、アテネ土着系元老院議員のヘロデスが、ギリシア語関連で言及されるのとは異なる<sup>35)</sup>。実は、クインティリウス一族のギリシア文人としての側面を伝える文献史料は、前述のフィロストラトス『ソフィスト列伝』、カッシウス・ディオ『ローマ史』、アテナイオス『食卓の賢人たち』と、すべてギリシア語のものなのである<sup>36)</sup>。

クインティリウス一族のギリシア文人としての側面は、皇帝家などの政権中枢の人々や元老院議員の一部のギリシア文化愛好サークル、ギリシア文化圏出身者など、限られた種類の人々にしか知られていなかったのかもしれない。少なくとも、首都ローマでの彼らを規定するような特徴ではなかった<sup>37)</sup>。それでは、クインティリウス一族が首都ローマで見せていた側面をどのように理解すべきか。次に節を改め、この点を検討する。

## 第2節 ローマ退役兵という起源

E. Bowieは、ギリシア文化圏出身者の価値観について論じた最近の論考で、アレクサンドリア＝トロアスの都市有力者層、すなわち退役兵入植者たちのアイデンティティに触れている<sup>38)</sup>。Bowieは、帝政期のギリシ

35) *Scriptores Historiae Augustae*, Vita Marci Antonini Philosophi, 20, 6; 2, 4.

36) マクシムス①についての小プリニウスの『書簡集』や『頌詞』の記述でも、ギリシア文人としての側面にはまったく触れられていない。

37) ペルティナクスがなぜギリシア関連の質問をしたのか詳細は不明だが、彼は皇帝となる前は首都長官を務めており、政権中枢にいた元老院議員であるから、コンディアヌス②について深く知っていても不思議はない。

38) E. Bowie, *Becoming Wolf, Staying Sheep*, J. M. Madsen and Rees, R. ed., *Roman Rule in Greek and Latin Writing*, Leiden and Boston, 2014, 39-78.

ア文化圏出身者の軍事経歴を、H. DevijverやH. Halfmannらのプロソポグラフィ研究の成果を元に、軍団兵、騎士身分将校（tribunus militum）、元老院議員の三点から考察し、当時のギリシア文化圏の人々が、帝国行政には深く関わりながらも、帝国西部や北アフリカの人々と異なってローマ軍務には就かない傾向を有していたこと、さらにローマ帝国や皇帝も、ギリシア人の参画を帝国統治に不可欠とは見なしていなかった可能性が高いことを指摘した。

この議論の過程で、Bowieは、アレクサンドリア＝トロアス出身の既知の騎士身分将校6名のうち、ほぼ全員が退役兵入植者の子孫で、勤務時期がアウグストゥス帝期からウェスパシアヌス帝期にかけてであったと指摘し、その要因を、入植第一世代の子や孫にあたる彼らが、自身の家系的起源に意識的であったからだとした。その上で、彼は最初の東部出身元老院議員の集団もまた同様に退役兵入植者の子孫であったことを示し、その一人であるトロアス出身の元老院議員T. ユニウス・モンタヌスの軍事経歴にも注意を向ける。

Bowieの議論は、ローマ植民市出身者とその他のギリシア文化圏出身元老院議員との差異を指摘している点で注目すべきものであるが、彼の主眼はギリシア土着の元老院議員たちに置かれている。そのため、彼は、トロアス出身元老院議員については本格的に考察しはしないものの、マクシムス①とマクシムス②とをモンタヌスと同じ、最初の東部出身元老院議員集団として分類し、退役兵起源へのクインティリウス一族の意識の強さを示唆している<sup>39)</sup>。

もっとも、Bowieは元老院議員身分についての分析を150年頃までに留めており、ハドリアヌス帝期までの状況しか扱っていない。本稿9頁で述べたような、ローマ植民市出身者の「ギリシア化」を前提としているからであろう。モンタヌスについても、元老院議員となっからの軍事経歴のなさを強調もしている。そのため、クインティリウス一族のその後への目配りもできていない。だが、実際はこの一族は、マクシムス②より後の世代においても、依然として軍人であることを強く意識し、そうした経歴を積み続けていった。

まずクインティリウス兄弟についてはどうか。その元老院議員経歴の

39) Bowieはマクシムス①と②をこの元老院議員集団のメンバーとして、Halfmannのリストの番号だけ挙げているが、それ以上分析することはしない。

中に、明確に軍事的なものはない。しかし、この兄弟のパイディアを賞賛する、本稿8頁で述べたカッシウス・ディオの記述は、続けて兄弟の名声のひとつとして、統帥術を挙げるのである。彼らの息子のコンディアヌス②、マクシムス④についてはより明らかである。第1章で述べた通り、彼らは、現実に軍事属州である両パンノニアの総督であった可能性が高く、少なくともマルコマンニ戦争で指揮を執った。二人は戦争そのものを終結させることはできず、マルクス帝自身が出陣することにはなったものの、A. Birleyは、彼らがマルクス帝に九度目の最高司令官歓呼をもたらすほどの功績を立てたと推測する<sup>40)</sup>。そして、ディオは、その精神力、勇敢さと豊富な経験を、彼らの父親であるクンティリウス兄弟についてよりも詳しく述べるのである。

このように、クインティリウス一族は、コンモドゥス帝期にいたるまでずっと、退役兵という起源に対して意識的であり、ローマ元老院議員としても、軍務を重視する姿勢を持ち続けたのである。コンモドゥス帝が恐れたのは、この一族の、元老院議員としての勢力だけではない、ローマ軍人としての尚武の気質、武人的心性にあったのではないか。そう考えると、前述の『ローマ皇帝群像』の記述についても納得できるのである。

実は、彼らの出身都市アレクサンドリア＝トロアスについても同様のことがいえる。時代が下がるにつれ、たしかにこの都市は「ギリシア化」していくのであるが、その一方で、4世紀になっても、ラテン語使用を維持し続けてもいる。ローマ植民市としての性格を著しく失うことはなかった<sup>41)</sup>。ギリシア文化圏の中のラテン文化の「孤島」であるからこそ、かえってローマ人意識が強まったのかもしれない。

しかしながら、フィロストラトス『ソフィスト列伝』が伝えるクインティリウス兄弟像は、ヘロデス＝アッティクスと対立する、ギリシア文化圏出身元老院議員というものである。これをどう理解するべきか。J. H. Oliverは、両者の対立を、ギリシア文化人として名高い両者が、どちらがギリシア文化圏において高い位置にいるのかをめぐる争いであり、両者は基本的に同じような心性の持ち主であったと見なした<sup>42)</sup>。だが、こ

40) Birley, op. cit., 198.

41) Riçl, op. cit., 13.

42) Oliver, op. cit., 72.

れは、『ソフィスト列伝』に影響されすぎた見解といえる。

2世紀後半から3世紀初頭のギリシア知識人であるフィロストラトスの作品には、周知の通り、当時のギリシア文化圏の主思潮であるアッティカ中心主義が色濃く反映している<sup>43)</sup>。しかも、ハドリアヌス帝以降、ローマ帝国中央の積極的関与の下、アテネではさまざまな形で、昔日の栄光の「復興」が進められていた。とりわけ、ハドリアヌス帝のイニシアティブで創設されたパンヘレニオン同盟は、アテネをギリシア文化圏の中心とする思想を具現化していた。アッティカ中心主義に「実体」が与えられていたといえる<sup>44)</sup>。

このような時代、エーゲ海域北東に位置するアレクサンドリア＝トロアスは、ギリシア文化圏の周縁的存在にすぎなかった。この都市出身の人がローマ退役兵入植者の子孫であっても、そのことがギリシア文化圏の人々の意識に明確に上るはずがなかった。フィロストラトスは、ギリシア本土のアテネ土着家系出身のヘロデスがマルクス帝に対して、トロイア人であるクインティリウス兄弟を重用するのはおかしいと訴えたことが、クインティリウス兄弟との不仲を招いたというエピソードを伝える<sup>45)</sup>。まったく異なる文脈の他の箇所でも、アレクサンドリア＝トロアスを指して、「トロイア」と記している<sup>46)</sup>。ヘロデスが実際に兄弟をそう呼んだのかどうか、その信憑性は別として、フィロストラトスにとって、アレクサンドリア＝トロアスは、ローマ植民市でもヘレニズム都市でもなく、あくまでも「古の都市トロイア」であり、クインティリウス兄弟は「トロイア人」であった。アレクサンドリア＝トロアスはトロアス地方にありはしたが、古のトロイアとは所在地が異なってさえたのにもかかわらず、である。もちろんフィロストラトスがこれらの現実を知らなかったとは思えないが、彼はそれをおくびにも出さず、クインティリウス兄弟を、あたかもヘロデスと同じく、土着家系出身のギリシア文人であり、ギリシア文化を至上とする共通の心性の持ち主であったかのよ

43) 桑山「アテナイへの『あこがれ』とピロストラトス」『西洋古典叢書月報』82、2010年6月、3頁。

44) 桑山「ローマ帝国とパンヘレニオン」『古代文化』62-1、2010年、82-89頁。同「ハドリアヌス帝のアテネ「復興」とヘロデス・アッティクス父子」京都女子大学史学会『史窓』68、2011年、211-222頁。

45) Philostratus, *Vitae Sophistorum*, 559.

46) Philostratus, *Vitae Sophistorum*, 548.

うに描くのである。

一方、フィロストラトスと同じようにギリシア文化圏の出身であっても、カッシウス・ディオはまったく異なる立場にいた。ディオは、マクスィムス①が財務官として赴任した属州ビテュニア=ポントウスのニカイア出身である。コンモドゥス帝期に元老院議員として経歴を開始しており、クインティリウス一族肅清とコンディアヌス②のエピソードについても、自身が直接見聞したことを記したと述べる<sup>47)</sup>。彼は、隣接属州の名門であるこの一族の、ローマ帝国とギリシア文化圏への両属的特質をよく知る立場にいた。それゆえ、クインティリウス兄弟の特徴を正確に把握し、ギリシア学芸と統帥術の双方を挙げるのである。

以上のように、フィロストラトスの伝えるクインティリウス兄弟像は、ギリシア文化圏の価値観でゆがめられた、実態を反映していないものであった。実際には彼ら一族はローマ退役兵の子孫というアイデンティティを強く維持し、武に秀でた練達の元老院議員という、ギリシア土着系元老院議員たちとは異なる姿を持ってもいたのである。もちろん彼らは確かにギリシア文人でもあった。しかし、その側面は、ギリシア文化圏で強調されるほどには、彼らの本質ではなかった。Oliverら先行諸研究は、クインティリウス兄弟について伝える主たる文献史料がフィロストラトス『ソフィスト列伝』であり、カッシウス・ディオ『ローマ史』が断片的にしか現存しないため、この兄弟とその子どもたちの武人的側面を見逃し、彼らが単純にギリシア文化に染まり、土着系と同じような心性の元老院議員となっていたと見なしてしまったのであろう。

## おわりに

ギリシア文化圏のローマ植民市出身であるクインティリウス一族は、ギリシア文化に圧倒されていく母市の状況を反映し、ギリシア学芸を家学とし、世代を経るごとにその傾向を強めていった。しかし、その一方で、彼らは、ローマ軍退役兵の子孫としての意識を、ハドリアヌス帝期より後にはっきりと維持し続けたのであり、首都ローマで見せていたのも、こちらの顔であった。ギリシア文化に染まりつつも、彼らの意識

---

47) Cassius Dio, LXXII, 7.

の帰属先は、ローマ中央でもあった。彼らはギリシア文化圏ではギリシア文人としての側面を、ローマ帝国中央ではローマ人としての側面を使い分けていたのである。彼らをギリシア文化圏土着の元老院議員たちと同様の心性の持ち主であったということは難しい。

クインティリウス一族によるこうした使い分けは、ギリシア文化圏出身元老院議員の増加が、帝国中央の政治支配層の「ギリシア化」を即座に招いたのではないことを意味する。それと同時に、ギリシア文化圏に育ち、その「バイデシア」を深く取り込みつつも、ローマ人意識も維持していた彼らの存在こそが、ローマ帝国によるギリシア文化圏支配の特徴であったことをも示しているのではないか。これは、ローマ帝国が最終的にビザンツ帝国としてギリシア文化圏で生き延びていった背景となったようにも思われる。著者はこのような見通しを抱いているが、今回はクインティリウス一族しか対象とできなかった。今後は、ギリシア文化圏におけるローマ植民市やイタリア系の人々全体の役割を見直し、本稿の結論を敷衍できるかどうかを検討することが課題である。